

News Letter

Graduate School of Education

巻頭言	楠見 孝	研究科長	②
名誉教授から	矢野 智司 桑原 知子	名誉教授 名誉教授	③
研究ノート			④
教員から	西 見奈子	臨床心理学講座 准教授	
院生から	三田 桂子	博士後期課程1年	
社会人院生から	山中 左織	修士課程2年	
留学生から	Marcelo Piffaut Galvez	修士課程2年	
活動報告			⑥
附属臨床教育実践研究センターから	岡野 憲一郎	連携教育学講座 教授 附属臨床教育実践研究センター長	
教育実践コラボレーション・センターから	南部 広孝	教育社会学講座 教授 教育実践コラボレーション・センター長	
グローバル教育展開オフィスから	高山 敬太	グローバル教育展開オフィス 室長	
トピックス			⑦
「日本型」教育文化・知の継承支援モデル構築と展開プロジェクト支援モデル3	佐藤 卓己	副研究科長	
新型コロナウイルス感染症に係る研究科の対応について	西岡 加名恵	教務委員長	⑧
事務室から	中野 秋子	総務掛長	⑧
若手研究者出版助成事業			⑨
諸記録			⑪
1.主な出来事(R1.11.1～R2.3.31)			
2.入試結果(令和2年度)			
3.学位授与件数(令和元年度)			
4.教育職員免許状取得状況(令和元年度)			
5.外部資金受入れ(令和2年度)			
6.科学研究費補助金(令和2年度)			
7.教員寄贈図書リスト(令和元年度)			
8.人事異動(2019.12.1-2020.4.30)			
9.基金寄付者リスト			
諸報			⑫
新任教員・事務職員紹介			



京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製菓、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

新型コロナウイルスといかに向き合うか： 教育学研究科・教育学部の課題



教育学研究科長・学部長 楠見 孝

新型コロナウイルスが、全世界に広がり、教育学研究科・教育学部の教育も運営も厳しい状況におかれています。先生方、事務職員の皆様のご尽力で、授業や会議などがオンラインで行われていることに感謝申し上げます。さらに、教育学研究科ホームページにおける「オンラインによるICTを用いた学習・研究のために」やE.FORUM「子どもたち応援サイト」による情報発信は、京都大学全体、そして、全国の小中高の教育関係者に貢献しています。

こうした感染症の世界的流行は、100年前、スペイン風邪以来です。その患者数は世界人口の3割で、日本でも39万人が亡くなり、その中には京都大学の自由の学風を築いた折田先生（三高初代校長）も含まれていました。そして、この時にもマスク不足が生じました。今日、医療や科学技術が進歩しても、私たちは感染症に対して無知で無力であったことを知るようになりました。しかし、いまを生きる私たちは、叡智を結集して、コロナに関わる問題を一つずつ解決していかなければなりません。

新入生の皆さんにとっては、大切な入学式が中止になり、キャンパスでの交流もできず、さぞつらいことと思います。また、授業がすべてオンラインになり、とまどっていると思います。

しかし、新型コロナウイルスの感染拡大を抑えるために、大学ができることは、入学式を中止し、オンライン授業を行うことでした。また、私たち一人一人ができることは、手洗いとマスクをすること、対人距離をとることなどの習慣を形成して、感染リスクを下げる行動をとることです。

一方で私たち教職員は、意欲や夢を持って入学し、勉強を続けている皆さんのためにできるだけのことをしたいと思っています。

第1は、オンラインによるネットワーク作りの支援です。学生の皆さんはすでにLINE等でつながっていることも多いと思います。それに加えて、教育学部では、新入生全員と教員・先輩有志による新入生サポートサイトを大学の学習支援システムPandA上に作っています。ぜひ積極的に参加して下さい。

第2は、オンラインを使った授業や学習情報の提供です。新しい時代の教育実践に繋げるために、どのようにしたら、オンラインでの学習が進み、動機づけを維持できるかを工夫

し、評価したいと思っています。学生の皆さんからのフィードバックによって、改善をして、新たな教育を実現したいと考えています。

そこで、学生そして教員の皆さんに提案したいのは、ご自分の関心のあるテーマに加えて、コロナに関わる問題を、教育学や心理学でどう解決できるかに取り組み、社会に向けて発信することです。学校の休校と再開による児童生徒への影響、対人距離を取るなどの行動変容が人の心や社会に及ぼす影響、学校や家庭、個人に向けての支援のあり方、新しい教授法の開発など、多くの解明・解決すべきテーマがあります。

こうした問題解決のためには、様々な情報の中で、信頼できる情報を集めることが大切です。情報の中には、誤った情報や、感染者への差別や偏見に結び付くような情報があります。私たちは、これらの情報を批判的に判断し、思考し、信頼できる情報を人に伝えることが大切です。

教育学研究科・教育学部の教育目標の一つに「広い視野と異質なものの理解、多面的・総合的な思考力と批判的判断力」の形成があります。私たちは、現在の困難な状況に立ち向かうために、こうした力を身につけて、育て、発揮していくことが重要だと考えます。

いま、私たちは、コロナとの「戦い」の比喻を使って、「最前線」では医療従事者が「防御」が不十分のまま命をかけ、一方、市民は「緊急事態」だから行動が制限されていると、状況を認知しています。こうした比喻が、人の思考に影響を及ぼし、この状況をやむを得ないと思うようになっていきます。しかし、今後は、別の比喻、コロナと人の「共存」の比喻を使って、一人一人が、コロナの特質を理解して、感染リスクを下げるように、長期的に「付き合っていく」ものと捉えることが必要だと考えます。大学にとっては、リスクを評価し、リスクをコントロールしながら、学生の学習を持続し、研究や大学運営を進めていくことが、重要な課題です。

最後になりますが、教育学研究科・教育学部の学生、教職員が、新型コロナウイルスに関わる諸問題を解決していく中で、多くを学び、よりよい社会を築くことができるように進んでいきたいと考えています。



矢野 智司

「それから」と「これから」

4月1日に佛教大学に着任したものの、新型コロナ感染拡大のため、授業はweb上ですることになりました。課題と教材を送るときに、まだ見ぬ学生諸君にむけて次のような文章をつけておきました。

「歴史をふり返れば、これまでにペストやコレラやスペイン風邪が蔓延したことがありました。しかし、今回は誰も経験したことのない時間差なしの世界的規模でのパンデミックです。この未曾有の出来事のなかで、世界の在り方が刻々と変容していきます。世界経済は大きな打撃を受け、パンデミック以降の国際関係や国家や社会は想像もできないほど劇的に変化するにちがいありません。市民的自由を制限した例外状態が常態化する危険性もあります。同じ苦しみを経験した同胞として人類の連帯の方向に向かうのか、あるいは偏狭な国家中心主義に向かうのか、そのときそのときの個々の選択を通して、一人一人が問われることになります。

これを境に教育の在り方も大きく変わるだろうと思

います。教育や学習においてもインターネット世界とのつながりが深められることになります。反面ネット世界における教育・学習の限界性も問題性も明らかになると思います。バーチャルでない生身の先生の存在理由がどこにあるのか真価が問われると思います。このような時期です。世界がどのように動いていくのかを注視すると共に、時間を決めてメディアから離れて、優れた本を読んで思想と知識と技術とを学び、これからの世界と社会を作るために必要な力をつけて、出番が来るまへの準備をしておいてください。お互いに論理を深め感性を研ぎ澄ませましょう。授業で皆さんとお会いできるのを楽しみにしています。」

教育学研究科も、探究共同体として、この世界史の転換点に向かい合う思想と知識と技術とを共同して深める必要があります(4月14日脱稿:この原稿が印刷されるときには感染が終息してこの文章が無意味化していることを祈りつつ)。



桑原 知子

「イニシエーション」の波に揺られて

皆様、その後いかがお過ごしでしょうか?新型コロナウィルスの影響で、これまで経験したことのない新年度を迎え、様々にご苦労なさっているのではないかと推察いたしております。

私は、教育学研究科退職後、4月1日から放送大学に、公認心理師教育推進室・室長として赴任いたしました。千葉・幕張に本部がありますので、京都から通う予定でしたが、移動自粛のため、この原稿を書いている5月の段階で、まだ一度も「出勤」できずにおります。会議は全てWEBとなっていて、慣れない機械操作に戸惑う毎日です。

3月20日に予定されていた最終講義が5月31日に延期となっておりますが、遂にこれも中止と決定されました。参加を予定してくださっていたり、ご準備をしてくださっていた方々にはご迷惑をお掛けすることになり、心苦しく思っております。中止となったことで、「残念だ」と言ってくれる方も多く、ありがたく思っておりますが、きっと「最終」講義をするのはまだなのだと思っております。今後、ほんとうの「最終」講義ができる日まで、さらに精進を積み重ねる覚悟でおります。

3月下旬から4月中旬に至るまで、ずっと研究室の片付けをして、学生時代12年間、教員時代21年間の「断捨離」をし、多くのものを捨てました。本来ならば、ここで、イニシエーションの跳躍が行われるところでしたが、跳ぶべき先の社会そのものが流動的であったため、イニシエーションの移行がずっと続いているように思います。また逆に、社会全てが一緒にイニシエーションの波に乗っているような感覚も覚えております。この中から何を見出していくのか、私個人にとりましても、取り組むべき課題が与えられているように感じております。

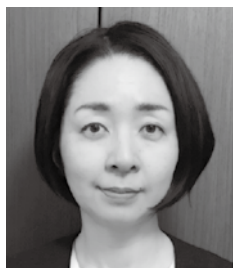
末筆になりましたが、皆様のご健康を、そして、世界の安定をこころよりお祈りいたしております。



教員から

臨床心理学講座
准教授

西 見奈子



思いを巡らす

ひとり机に向かって書き物をする時間が好きだ。あれを書こうか、これを書こうかと考えるのは心良い時間である。最近、気になっていることは母親が愛情をかけて育てないと子どもに問題が起きるという信念はどこから来たのだろうという疑問である。心理臨床でよく目にするけれど、それって本当にそうなの？ 誰が言い出したの？ いつからみんなそう思ってるの？ 考え始めるとなかなか分からないことだらけである。

日本では遠い昔から乳母制度があった。日本書紀にも登場するくらい。つまり母親以外の人が子どもを育てることが良しとされていた時代は長かった。母親以外の人子どもを育てること、母親が子どもに愛情をかけることは違う。乳母がいても、母親が子どもに愛情をかけることは十分にありうる。しかし、母親が愛情をかけて育てないと子どもに問題が起きるという信念は、母親自身が手をかけることを大事にみなし、母親の不在を愛情不足だとみなしやすい。だからそうした子育て観の元では、母乳育児が持て囃されても、乳母制度は流行らない。しかし、いつから変わってしまったのか。ヒントになり

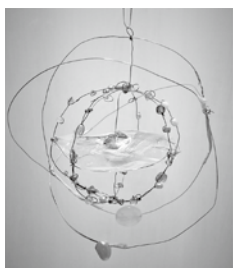
そうなのは、明治期に盛り上がった賢母思想だろう。福沢諭吉も与謝野晶子も、当時の知識人たちはこそって、母親自身が子育てをすることを勧めている。そこで批判の対象となった乳母の言われようはちょっとひどい。自分が卑しいとか、品性がないとか、教養がないとか。でも同時代の小説や随筆、日記などに登場する乳母は、無教養であっても、世話好きで、陽気で、時に心の支えとなってくれる人だったりもする。そうなるとますます分からなくなってくる。「母親が愛情をかけて育てないと子どもに問題が起きる」ってどういうこと？ こうした思いを巡らせながら史料を読んでいく作業は楽しい。

ー原稿を書いたのは、3月末だった。そのうち、見る間に新型コロナウィルスの感染が拡大し、人々は不安に呑み込まれていった。5月現在、まだその渦中にいる。久しぶりにこの原稿を読み返して懐かしい気持ちになった。これもまた失われた日常のひとつだった。そうだ。コロナが収まったら臨床心理学史の研究会でもやってはどうだろう。誰かと思いを巡らせてみるのもまた良いものかもしれない。

院生から

臨床心理学コース
博士後期課程1年

三田 桂子



異質性を活かした研究フィールドと思考の模索

新型コロナウイルスの出現によって世界規模の混乱の中で2020年度の春を迎えました。そのような中でも、私たちはあらゆる人や事物との関係から、自らの「支え」を見出し生き抜いています。「支え」の意味生成の深みに向かって研究をしていると、慣れ親しんだ在り方が崩壊する危機的状況の只中で「支え」が見出されることが多々みられます。心が生成する「支え」と「カオス」のダイナミックな様相に接近し、その緊張状態で生じている蠢きを研究の俎上にのせることが私の現在のテーマです。終わりの見えない苦闘が続く現況、私たちが新たな「支え」をまさに見出す契機にいることを実感しています。

さて、私は美大で用途の無いものづくりを学び、アーティストになる夢を追って国内外を放浪後、芸術プロジェクト運営の自転車操業に追われました。ある時、人が作品や自然に感応する瞬間に内的エネルギーが発奮する現象に興味を湧き、その勢いにまかせて本学部に学士編入し、その謎を抱えたまま博士後期課程に進学して

います。アカデミックな美術教育に浸ったゆえか、生来のものか、様々な物質の質感や感触に安らぎを覚え、言葉のニュアンスに一喜一憂し、作品やイメージを媒介にした人との対話様式が私のコミュニケーションの根底にあることを感じます。心理臨床の場合は人と人との出会い(出会い)に焦点が当てられます。臨床実践を通じ、その舞台は日毎に未知の領域に感じられ、驚きと揺らぎの連続です。このような芸術領域から参入した異質性を自覚しつつ、本大学院だからこそ、その異質性を排除せず、多分野との重なり合いをもって研究フィールドを開拓できる可能性を感じています。この写真は、修論の考察において硬直しがちな言語的論考との苦闘の末、造形感覚と思考を繋げようと試作したコスモロジー立体モデルです。ものづくり的発想と臨床実践と論考の往還と摩擦を通じて研究してゆける体質づくりに取り組んでいます。

社会人院生 から

教育・人間科学講座
教育方法学コース
修士課程2年

山中 左織



扉を開けると

教育学研究科への進学を意識したのはいつ頃からだろう。小学校教員として、子どもたちと共に学ぶ中で、「教育や学びの意味を問い直したい」「もっと深く学んでみたい」との気持ちが募った。

大学院で使うであろう沢山の専門用語を頭に入れて、新しい扉を開いてみた。しかし、当初は授業や研究室での議論のスピードや迫力に圧倒されるばかりで、メモを取るどころではなかった。まるでどこかの国に放り込まれたようだった。正確に頭に入れたはずの言葉は真の理解には至っていなかったと痛感した。同時に、小学校の教室で、自分の考えはあるのに言葉が出ない子どもの悔しい気持ちやグループでの話し合いで周りの反応を気にして意見を言うことを躊躇う子どもの気持ちがわかる気がした。

授業では、十分に議論できない私にも発表が回ってきた。ある教育評価学者の論文について発表するという課題だった。ゴールデンウィーク中、初めての課題にひたすら向き合うが、発表の日が迫るばかりで、とうとう研究室で「わからない」と打ち明けた。関連文献の紹介、具体例

を挙げながらの解説などの院生たちのサポートのおかげで、論文の要旨が理解でき、また理解することの面白さにも気づくことができた。大学からの帰り道、その理解が身体に染み渡っていくことがうれしくて、内容を反芻しながらの出町柳駅までの道は、急いでもないのに自然と駆け足になっていた。今振り返ると、これからの可能性や希望が少し見えたようでもあった。

もちろん、一人で机に向かい、基本的な知識を学ぶことや気の済むまで粘り強く目の前の疑問に向き合う時間は必要である。しかし、学んだことを研究室や授業内の議論の中にはめ込み、もう一度迷い直し、共に作り上げた理解に再度納得する…。それは大変充実した学びの日々だと思う。こうしたさらなる学びへ導いてくれる知的探求の機会やその中で理解が深く身体に染み渡るような経験、目標のために苦しみもがくことがこれからどのくらいあるだろうか。子どもたちの姿を時折思い浮かべつつ、苦戦しながらも、論証し合い、いつの間にか当然視していた価値観を疑い、考え直す喜びを続けていきたいと思っている。

留学生から

修士課程2年

Marcelo Piffaut Galvez



刻々と変わっていく世界における移民研究

京都で過ごすようになって四回目の春を迎え、修論に追い詰められている。私は国際移民の現象、特に日本におけるイスパノアメリカ人のケースを研究している。当初、イスパノアメリカ人が日本の社会・文化にどの程度、また、どのように適応しているかという幅広いテーマを明らかにしたいと考えていたが、研究を進めるにつれ、移民者の生活の個々具体的な側面がもっと面白くなり、それらを深く探索することに意義があると思うようになった。現在、イスパノアメリカ人どうしの対人関係、彼らのアイデンティティ、日本のメディア映像作品の強い影響、国際恋愛、また、彼らの文化を背景とした仕事への態度といった、様々なテーマを構想しており、それぞれをより深く考察するため、修論とは別の研究論文を書く予定である。京都大学とその先生方が研究の自由を奨励してくださることで、これらの多様なトピックに研究を適応させていくことができた。

ところで、現在、新型コロナウイルスの発生という世界

的な出来事に直面している。それは世界のパノラマを急速に変えていて、私たちはこれがはたしてどのように終わるのか、知らずに生きている。近年、日本の外国人労働者数は着実に増加しているが、コロナウイルスの発生による不況で、2008年の金融危機以来、最も急速な景気後退が起き、その真っ只中で多くの移民者が苦労している。このことが、国際移住プロセスにどのように影響するか、離れた故国にいる親族や知人がこの逆境に立ち向かっている最中、移民者の生活はどのような影響を受けるか、さらには、受入れ国の移民政策や経済などはどう左右されるのか等々、検討すべき多くの問題が、この文脈から浮上している。この不確実性と恐怖の時期は、人生における重大な転換期になるかもしれない。そのように考えれば、変化する世界、変化する移民現象に即応した研究は欠かせないものであり、研究者としての責任は、移民たちの目下の悩みを直視し、問題に立ち向かっている移民者の言葉に耳を傾けることであると思う。

附属臨床教育実践研究センターから

臨床教育実践研究センターの活動

連携教育学講座 教授／附属臨床教育実践研究センター長 岡野 憲一郎



当センターは、一般市民に開かれた臨床実践としての、心理教育相談室での大学院生や教員による日々の臨床活動をその主たる業務としています。また、学校現場に密着したテーマを現場に還元することを目指し、教師、臨床心理士、精神科医等が交流し思索を深める「リカレント教育講座」、一般市民への教育的啓発を目的とする外国人客員教授による「公開講座」、学校現場での実践を心理・教育的に検討する「現場実践ケースカンファレンス」、東日本大震災被災者に向けた「こころの支援室」の活動、センター関連の研究成果を収めた「京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要」の発刊など、教育・実践・研究活動を進めています。

昨年度のリカレント教育講座(第23回)は2019年8月18日(日)に開催し、『『心の教育』を考える―多職種・多機関の連携―』をテーマに、シンポジウムや個別事例の検討を行いました。今年度は、『『心の教育』を考える―思春期とSNS―』をテーマとして8月23日(日)に開催を予定しています。また11月1日(日)には、ニューヨーク大学のドナ・オレンジ先生をお迎えし、『『気候正義』と精神分析』と題した公開講座を開催いたします。(ただし以上の予定は、新型コロナウイルスの影響で変更となる可能性があります。)

東日本大震災に関連して関西に避難、移住して来られている方々へ

の支援を実践しているこころの支援室では、教員、学生が協働し、定期的な支援活動を行っています。2019年12月には「ツリー・ハウスを作ろう&和(わ)・話(わ)・輪(わ)の会」を院生スタッフ主導のもとに開催し、共通の背景を持つ参加者同士が新たに出会ったり、継続して来られている参加者同士が再会し、近況を伝え合ったりする機会とすることができました。震災から9年以上が経過し、それぞれの世帯の状況も個別化してきていますが、参加者のニーズに合わせ、今後もこのような支援活動を継続してまいります。



(写真は、昨年秋の公開講座のものです)

教育実践コラボレーション・センターから

センターの活動について

教育社会学講座 教授／教育実践コラボレーション・センター長 南部 広孝



教育実践コラボレーション・センターは2007(平成19)年4月に、本研究科の「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」を推進すべく設置されました。センターの目的は、現場から持ち込まれた具体的な問題に対し、異分野融合チームを組織するなどして、研究科としての組織的な対応をコーディネートすることにあります。子どもをめぐる教育問題を「生命性」と「有能性」という2つの軸として取り出し、そのトータルな育成の方法を探っています。活動の実施にあたっては、学校や他の機関との連携(コラボレーション)を進めています。現場(フィールド)で生じている個別的、具体的な状況や課題を過度に一般化することなく、その場に寄り添いながら考えていくことを重視しています。また、教育研究におけるさまざまなアプローチを領域横断的に組み合わせながら問題に取り組んでいます。こうした領域間の連携もコラボレーションの一面です。

センターには、学校教育改善ユニット、新しい教育関係ユニット、学習空間創造ユニット、国際関係ユニット、E.FORUMユニットという5つのユニットが置かれており、相互に情報を共有したり意見を交換したりしながら活動を進めています。センターの活動では、どこでも、誰にでも適用可能な「答え」を追求するわけでは必ずしもありません。むしろ、それぞれの活動のプロセスにおいて、参加者同士が関わり合う中で「その場」で得られるものを大切にしています。それは、現在の「研究成果」に求められている普遍性や一般性を有しているとは言えないかもしれませんが、活動の参加者を含む人びとの共感や納得に結びつくこともあれば、新たな発想へとつながることもあると考えています。

教育実践コラボレーション・センターの活動を支えてくださっている教職員、大学院学生、学外でご協力いただいている皆様に感謝するとともに、これからもご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

危機をチャンスに：ポストコロナ時代の教育研究のグローバル化を見据えて

グローバル教育展開オフィス 室長 高山 敬太



グローバル教育展開オフィスの事業の多くは、学生や教員を海外に送り出したり、海外の研究者を国内に招聘したりする形で、何らかの形で国境移動を伴います。この意味では、新型コロナウイルスの影響により国境が閉じられた状況は、当オフィスの活動を著しく難しくしています。基盤事業の6-7割において、海外渡航や招聘を前提にしてきた当オフィスは、この「危機」をどう乗り切っていくのでしょうか。幸いなことに、危機的状況というのは、見方を変えれば、新たな可能性を模索し、発見する機会でもあります。

当オフィスでは、院生を対象に国際学会での発表支援や、研究の国際化支援を行ってきました。本年度は、これらの支援をさらに拡充するため、当研究科の教員と院生を対象に、研究論文の英語翻訳や校正等に関する支援を加えることにしました。より多くの当研究科の研究者が、国際的な学術的論争に参加することを支援できればと思います。

また、新しい試みとして、当オフィスが主導し全研究科で進行しているプロジェクト、『「日本型」教育文化・支援モデルの創出と発信』により直結させたレクチャー・シリーズを企画しています。『越境する「日本型」教育の歴史的・多角的理解に向けて』というタイトルで、月に一回ほど、国内外の研究者に講演をしていただきます。20世紀初頭、台湾や韓国

で行われた植民地教育、ハワイ、北米、南米に渡った日系移民が彼の地に持ち込んだ教育実践、さらには、戦後、アジアの開発モデルとなった「J-Model」としての日本型教育、民間レベルでは、生活綴方教育、「学びの共同体」、授業研究、そして最近では「特別活動(Tokkatsu)」等、実に多様な「日本型教育」の越境の事例が存在します。過去100年の間、様々な歴史状況下において越境の経験を経た「日本型教育」を、その恩恵や暴力を受けた人々の経験から検証し直すことで、「日本型」とされる教育の内実と、その歴史的継続性と変遷に接近できるのではないかと、そんなことを考えて企画いたしました。新型コロナウイルスの今後の状況にもよりますが、当面の間、講演はすべてZOOMで行い、録画・編集後、当オフィスのホームページにて後日公開します。これにより、ホームページをより発信型の、リソースアーカイブとして利用価値あるものに変えていくことができればと思っております。

ポスト・コロナ社会における教育研究のグローバル化の在り方を見据えつつ、新しいことに挑戦しておりますので、皆様のご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

トピックス

「日本型」教育文化・知の継承モデルの構築と展開プロジェクト支援モデル3

副研究科長 佐藤 卓己



本プロジェクトは、日本の教育を支えてきた文化の仕組みをグローバルな視点から問い直すことで、「日本型」教育を新しいグローバル・スタンダードとして構築する基礎的な作業として開始されました。支援モデル3は、「次世代教育」をキーワードに、師弟関係、伝統文化などの側面から、教育文化を探究しています。ここでの教育とは、空間的には狭義の学校を超えて生涯学習やメディア情報行動まで広い領域に、時間的には江戸以降をとらえる長い射程に及びます。現在行われている教育文化の日本型「継承」に力点を置く個別研究は、大きく三つのグループにまとめられます。

まず日本型「私的」教育モデルの歴史的研究としては、江戸期を扱う「日本教育文化における「江戸」―「伝統」の活用・誤用・悪用の事件簿」(VAN STEENPAAL, Niels)、大正・昭和戦前期の『「日本型」リスベクタビリティの創出」(竹内里欧)、昭和戦後期の「合格体験記のメディア

文化史」(佐藤卓己)が時系列的に展開されています。ついで日本型「公共」教育モデルの空間性を問い直す研究として、「日本型教育モデルの基底―「日本の学校」の成立とゆらぎ」(石井英真)、「戦後日本の読書環境―公立図書館と貸本屋の比較から」(福井祐介)が進められています。そして、日本型「次世代」教育モデルの理論的な考察である「ジェネレイショナルサイクルの視点から見たライフサイクル研究」(西平直)、その具体的な事例としての「「日本型」心理療法の教育と訓練」(田中康裕)、「日本の精神分析におけるスーパービジョンと教育分析の歴史」(西見奈子)がゆるやかな連携をとりながら進められています。歴史的・時間、公共的空間、人間の関係という三つの側面から日本型教育文化の可能性を探り、支援モデルとしての強度と持続性を検討することが今年度の課題となっています。

新型コロナウイルス感染症に係る研究科の対応について

新型コロナウイルス対応についてー授業のオンライン化を中心に

教務委員長 西岡 加名恵

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、京都大学大学院教育学研究科・教育学部では、5月6日までの休講期間を経て、5月7日以降、100%の授業をオンライン化して開講しています。ここでは、これまでの研究科の取り組みを紹介いたします。

まず、研究科として迅速な意思決定を図るために、新型コロナウイルス対応ワーキンググループ（以下、WG）が設置されました。3月13日から5月18日までに、既に7回のWGが開催され、その時々の情報共有が図られるとともに、その後の対応が議論されています。

授業のオンライン化に対応するためには、教員を対象とした研修の提供と、学生側の受信環境の整備が必須となりました。京都大学の学習支援システムであるPandAやネット会議システムZoom（京大がライセンスを購入）について、情報環境機構や高等教育研究開発推進センターによる全学を対象とした研修に加え、研究科独自でも既に6回の研修を提供しました。また、メール通信（5月18日までに20報）やサポートサイトによるきめ細やかな情報発信を行っています。さらに、ニー

ズのある教員に対しては、ICT支援員（雇用された院生が担当）11名が支援を提供している他、オンライン化サポート教員8名が質問への窓口として対応しています。

一方、学生の受信環境については、当初の調査で約2割にデータ通信容量に制限がかかっている状態が明らかになりました。これについては授業担当教員に対し、データ通信容量の縮減を、文書にてお願いいたしました。その後、全学からルーターの貸し出しも始まり、事態の改善が図られています。

この原稿を執筆している5月18日現在でも、京都府においては緊急事態宣言が継続しており、コロナ収束の目途は立っていません。オンライン授業によって過剰負担に陥っている学生や、アルバイトの縮小に伴い経済的に困窮している学生がいるなど、課題は山積しています。コロナ禍においても教育と研究をできるだけ継続していけるように、引き続き最善を尽くしていきたいと考えています。

事務室から

新型コロナウイルスとコミュニケーション

総務掛長 中野 秋子

4月1日付で総務掛に着任いたしました中野秋子と申します。

皆様ご承知の通り、今年は年明けから始まった新型肺炎の波に世界中が巻き込まれてしまった特別な年となりました。2月頃までは「年度末が大変」「暖かくなるころには終息しているだろう」との思いでしたが、事態は年度を超えて悪化の一途をたどり、この原稿を書いている今は「緊急事態宣言」が全国に拡大、京都大学でも対応レベルが引き上げられ、会議は原則オンライン、事務は出勤と在宅の交代制が敷かれています。

オリンピックに向けて首都圏では「テレワーク」が盛んに叫ばれていましたが、オリンピック自体は延期になったものの、パンデミックを防ぐという大きな目的によって全国的に「テレワーク」が一気に浸透した感があります。

先日新聞を読んでおりましたら、あるIT企業の社長が「普段から遠隔会議などを行っていたので、比較的スムーズに在宅勤務に移行する

ことができた。ただし、それは日頃のコミュニケーションの蓄積があってこそのこと。だから新入社員には在宅勤務はできない。」と話していました。まさに本研究科の「新入社員」である私にとって、在宅勤務はハードルが高く、どのように乗り越えればいいのか苦慮しているところです。

本学部・研究科の「新入生」にとっても、5月6日までは授業が休止、その後が遠隔授業の予定となっており、「コミュニケーションの蓄積がない」という意味では大変なスタートになったと思います。ただ、本研究科では早い段階からワーキンググループを発足し、教職員が一丸となって「新入生」のサポート体制を築いています。

このニュースレターが皆様のお手元に届くころには新型肺炎が終息へと向かい、従来のシステムと今回必要に迫られて導入されたシステムの良い部分を合わせて、より深くコミュニケーションをとれる新たなステージに進むことを願っています。

若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学総長裁量経費を得て、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っています。
本制度を利用して昨年度は5件採択されましたので、ご紹介します。



ブラジルでの校長直接選挙―教職員と保護者と児童生徒みんなで校長を選ぶことの意味

東信堂

田村 徳子 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成30年7月修了／びわこ成蹊スポーツ大学 講師

ブラジルの公教育には、教員、職員、保護者、児童生徒による直接選挙で初等中等教育の校長を選考する制度が存在する。校長直接選挙と呼ばれるこの制度は、保護者のみならず、児童生徒までを含めて、しかも直接参加という形態をとっている点で、世界的にみても極めて特殊な校長採用制度である。諸外国と同様、ブラジルでも1990年代に教育改革が取り組みられ、校長に求められる専門性は高まっている。こうしたなか、なぜあえて校長の専門性を確保するには非効率にみえる校長直接選挙制度を用いて、校長を選考しているのだろうか。

本書は、ブラジルで校長直接選挙制度が制定されるに至る歴史的経緯を紐解くとともに、実際のケーススタディを通して、校長直接選挙の機能と意味を考察したものである。



アメリカ合衆国の学習障害児教育 学校教育における支援提供のあり方を模索する

京都大学学術出版会

羽山 裕子 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成29年7月修了／滋賀大学教育学部 准教授

現在、通常の学級にも支援の必要な子どもがいるとの認識は広く共有されています。しかしながら、実践上は、支援の入り口の時点で既に課題が見られます。すなわち、通常の学校という、必ずしも障害児支援の専門知識やリソースが蓄積されていない場においては、「誰が特別な支援を必要としているのか」を判断すること自体が極めて困難なのです。

このような状況を打開するヒントを得るため、本書では、支援の必要性を見落とされがちな学習障害児に焦点を合わせて、その先進国であるアメリカに注目して研究を行いました。支援対象児の識別から支援提供へと至る校内枠組みがいかに構築されようとしたのか、その模索の過程や普及後の批判の中から、どのような論点が浮かび上がるのか。学習障害という一つの障害についての考察ではありますが、特別支援教育全般に通ずる論点を提示できていれば幸いです。



桑原正雄の郷土教育 <資本の環>の中の私達

京都大学学術出版会

須永 哲思 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成31年3月修了／日本学術振興会特別研究員PD・京都外国語大学非常勤講師

「郷土教育」とは何か？一般的には、生まれ故郷への愛情を養成する教育内容や、子どもに身近な生活地域を学習対象として重視する教育方法などがイメージされがちです。しかし、1950年代には、戦前の郷土教育とも現代的な郷土学習・地域教育とも異なる試み、すなわち、戦後の新設教科である社会科の中で子どもに社会のあり方をどのように教えるかという試みが、戦後「郷土教育」として実践されていました。

運動を率いた桑原正雄は、1950年の「レッド・ページ」で教壇を追われた後、郷土教育全国協議会という民間教育運動を組織し、小学校社会科教科書『あかるい社会』の出版に携わりました。桑原の足跡や1950年代の「郷土」をめぐる教育論争を辿り直すことは、地域社会と教育のあり方を再考する上で、今日なお多くの示唆に富んでいます。



心理療法過程で生じる夢の意味 夢の構造面についての分析から

創元社

粉川 尚枝

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成30年5月修了／京都大学こころの未来研究センター 特定研究員

臨床心理学では、私たちが睡眠中に見る夢に心の状態や心理的な課題が現れるとされて、心理療法の中で役立てられてきました。昨今の脳損傷研究からも、自己イメージや自分と他者との関係について考える脳の領域と、夢を見ることとの関連が示唆され、夢と心の関連性は実証されつつあります。日々の夢は忘れがちですが、ふと印象に残る夢もあり、夢に興味を持ったことのある方も多いのではないのでしょうか。

本書は、複数の臨床事例研究への数量的分析、非臨床群への質問紙調査、著名な臨床家らの文献研究から構成され、夢を通して起こる心の変容プロセスを、夢の中での私と他者との関係性や起承転結といった夢の構造面から検討しています。夢見手の心の変容の契機となる夢や、日本人の夢の特徴など、夢についての興味深い視点を少しでもお伝えできれば幸いです。



発達科学から読み解く親と子の心—身体・脳・環境から探る親子の関わり

ミネルヴァ書房

田中 友香理

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成31年3月修了／関西大学社会学部日本学術振興会特別研究員PRD

赤ちゃんや子どもの心は、他者と体を共有する、体を触れ合わせる等他者と関わる経験を通して発達します。そのため、子どもの心の育ちを理解するためには、子ども側だけでなく、子どもと日々関わる親の側の心の育ちについても理解することが重要です。本書は、「親子の心の育ちをセットでみる」という点を軸に据え、「子育て環境と心と脳の発達の関係」「親子の身体接触が心と脳に与える影響」「親としての心と脳の発達と親への支援」「日々進化する社会環境における心と脳の発達」といったテーマについて、エビデンス(科学的根拠)にもとづいた幅広い知見をわかりやすく紹介しています。

子育てや教育に携わる方や研究者をはじめ多くの方に手に取っていただき、現代の親子の心の発達について、科学的な知見に基づく理解を深めていただければ幸いです。

主な出来事(R1.11.1～R2.3.31)

11月

- 5日(火) 教育認知心理学講座
Mei-Shiu Chiu教授 講演会
「混沌した世界・データを教育分野のために純粋な心と理論で」
教育学部本館
- 8日(金) 小中高大連携:滋賀県立膳所高等学校
特別授業「図書館の歴史と多様性」
(講師:福井佑介講師)
総合研究2号館
- 14日(木) 小中高大連携:奈良県橿原市立白檀中学校
特別授業「命の授業～ダイバーシティと生きる～」
(講師:安藤 幸講師)
奈良県橿原市立白檀中学校
- 21日(木) グローバル教育展開オフィス
レクチャーシリーズ第4回 Prof. Aaron Benavot 講演会
Global learning metrics: Historical roots, current constructions, notable critiques
教育学部本館

12月

- 1日(日) こころの支援室
「ツリー・ハウスをつくろう&和・話・輪の会」
総合研究1号館
- 14日(土) E.FORUM 実践づくりフォローアップ講習 実践交流会
総合研究2号館
- 16日(月) グローバル教育展開オフィス
レクチャーシリーズ第5回 Prof.Bob Lingard 講演会
Researching and theorising education policy situated in/against the changing spatialities of globalization
国際科学イノベーション棟
- 18日(水) グローバル教育展開オフィス
レクチャーシリーズ第6回 公開特別講演
幼児教育のエスノグラフィ:本の紹介と内と外から見た日本の教育研究への回想
(プレゼンター:林安希子 明治大学専門職大学院ガバナンス研究科助教、
ジョセフ・トービン ジョージア大学教育学部教授)
教育学部本館
- 21日(土) **環境・防災地域実践活動高校生サミット 高大連携フォーラムin京都大学**
- 25日(水) グローバル教育展開オフィス
レクチャーシリーズ第7回松木邦裕×西平直「稽古と無心」の対話
(講演者:松木邦裕 京都大学名誉教授・精神分析オフィス所長)
教育学部本館

3月

- 28日(土) **矢野智司教授 最終講義「先生が生まれ教育が始まる」**
国際科学イノベーション棟

諸記録

入試結果(令和2年度)

◎教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文系	44	121	119	44	55
	理系	10	38	36	11	
特色入試		6	36	36	6	6
学士入学(第3年次編入学)		10	16	16	7	6

※前期日程の募集人員は、特色入試において最終的な入学手続者数が募集人員に満たない場合には、残余の募集人員を加えます。()内の数は外国人留学生で内数

◎教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
教育学環専攻	修士課程	研究者養成プログラム	37	58(7)	58(7)	36(4)	35(4)
		教育実践指導者養成プログラム	5	9	8	3	2
	博士後期課程	研究者養成プログラム	若干名	10(3)	10(3)	5(2)	5(2)
		臨床実践指導者養成プログラム	4	6	6	3	3

※博士後期課程(研究者養成プログラム)は内部進学者を除いた数。()内の数は外国人留学生で内数

学位授与件数(令和元年度)

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	72
	教育学環専攻	41
修士	教育科学専攻	5
	臨床教育学専攻	3
	課程博士	15
博士	論文博士	13

教育職員免許状取得状況(令和元年度)

中学校教諭専修免許状	0
中学校教諭1種免許状	2
高等学校教諭専修免許状	0
高等学校教諭1種免許状	6
特別支援学校教諭1種免許状	0

外部資金受入れ(令和2年度)

◎共同研究

研究題目	委託者	担当者
筆圧とストレスに関する研究	株式会社ワコム	野村 理朗

◎受託研究

研究題目	委託者	担当者
活力ある生涯のためのLast 5Xイノベーション拠点「女性と子どものこころとからだの健康サポート」	国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)	明和 政子
ビッグデータ・AIを活用したサイバー空間基礎技術／学習支援技術／高精度教育ビッグデータをベースとした教育支援の公教育への導入推進	NEDO	久富 望
二国間交流事業(共同研究)フランス(CNRS)との共同研究:人間変容の政治教育:哲学と教育の学際・国際研究	独立行政法人日本学術振興会(JSPS)	齋藤 直子
二国間交流事業(共同研究)イスラエル(ISF)との共同研究:親-子の相互作用における神経生理学的同期性	独立行政法人日本学術振興会(JSPS)	明和 政子
二国間交流事業(共同研究)英国(OP)との共同研究:実行機能を支える方略的スキル知識の獲得とその発達に関する国際共同研究	独立行政法人日本学術振興会(JSPS)	齊藤 智
革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM)「活力ある生涯のためのLast 5Xイノベーション」拠点女性と子どものこころとからだの健康サポート:育児サポート	国立研究開発法人科学技術振興機構	明和 政子

◎寄付金

研究題目	寄附者	担当者
新型コロナウイルスに対処する追跡テクノロジーの妥当性について	The University of Melbourne ProfessorYoshihisa Kashima	楠見 孝
情報分野における専修学校と専門職大学院大学の教育史に関する調査・研究	京都情報大学院大学 学長 茨木俊秀	田中 智子

科学研究費補助金(令和2年度)

事業名	研究課題名	氏名
基盤研究(A)	身体的表象から自他分離表象にいたる発達プロセスの解明	明和 政子
基盤研究(B)	なつかしさ感情の機能と個人差:認知・神経基盤の解明と応用	楠見 孝
基盤研究(B)	戦後日本における政治家・財界人の教育観に関する教育社会学的研究	稲垣 恭子
基盤研究(B)	後発国における大学院教育及び学位制度の導入と変容に関する比較研究	南部 広孝
基盤研究(B)	パフォーマンス評価を活かしたカリキュラム・マネジメントの改善方略の開発	西岡 加名恵
基盤研究(B)	ゼロ年代以後の教育歴とライフコースの変化に関するパネル調査研究	岩井 八郎
基盤研究(B)	批判的犯罪学の観点をふまえた非行からの離脱過程に関する研究	岡邊 健
基盤研究(B)	「畏敬」の心理・生物学的基盤とその効用に関する構成論的研究	野村 理朗
基盤研究(B)	日本植民地統治下台湾における教育の「植民地性」再考ー共時的・通時的比較分析	駒込 武
基盤研究(B)	実行機能を「実行」する知識の獲得過程と運用機構の解明	齊藤 智
基盤研究(B)	近代日本の政治エリート輩出における「メディア経験」の総合的研究	佐藤 卓己
基盤研究(C)	<哲学の女性性>とアメリカ哲学のグローバルな再生:政治教育の実践哲学研究	齋藤 直子
基盤研究(C)	心理アセスメントにおけるスーパーヴィジョンシステムの構築	高橋 靖恵
基盤研究(C)	教師力(タクト)熟達の日独比較ー学校日常の緊急性・不確実性対処に関する実証研究	鈴木 晶子
基盤研究(C)	国際博覧会条約(1928年)及び博覧会国際事務局(1931年)の成立に関する研究	佐野 真由子
基盤研究(C)	大正・昭和初期都市新中間層における理想的人間像の形成と変容	竹内 里欧
基盤研究(C)	教育成果の質的測定を活用した教員・学校・教委連携型教育改善システムの開発的研究	服部 憲児
基盤研究(C)	非英語圏トランスナショナル高等教育の展開に関する国際比較研究	杉本 均
基盤研究(C)	資質・能力を育成する授業づくりを軸にした学校改善の方法論に関する開発研究	石井 英真
基盤研究(C)	共感性の発達基盤に関する縦断データを用いた行動遺伝学的研究	高橋 雄介
基盤研究(C)	ソーシャルワーク専門職教育における「多様性教育」の国際比較研究	安藤 幸
基盤研究(C)	明治期におけるカナダ・メソジスト教会の教育事業ー公教育と学校制度の展開への対応ー	田中 智子
基盤研究(C)	ブータン社会における次世代支援とモラル育成ーサステナビリティとスピリチュアリティ	西平 直
基盤研究(C)	他者の「受諾」に向けた哲学実践:アメリカ超越主義の教育的意義をめぐる国際対話研究	齋藤 直子
基盤研究(C)	Do East Asian Students Achieve Highly at the Cost of Well-Being? Critical Analysis Utilizing PISA	Rappleje Jeremy
基盤研究(C)	日本の精神分析史の構築ー古澤平作の遺品調査を通してー	西 見奈子
若手研究(B)	近世教育メディア史における「無料」の価値ー「施印」に着目して	ファンステーンパール ニールス
若手研究	Round Studyの有効性の検証と評価シートの開発・効果検討	黒田 真由美
若手研究	図書館の社会的責任に関する戦後史研究	福井 佑介
若手研究	高齢期の孤高状態と社会的孤立の違いの検証	豊島 彩
若手研究	自閉症の選好性過剰説の認知科学的検討	明地 洋典
若手研究	地理的空間・場所にに基づく世界市民的教育の理論と実践に関する研究	広瀬 悠三
挑戦的研究(萌芽)	ビルドゥングスロマンと「女性の生き方」の表象に関する比較文化社会学研究	稲垣 恭子
挑戦的研究(萌芽)	対人相互作用における内受容ー外受容感覚の統合とその発達機序の解明	明和 政子
研究活動スタート支援	海外に長期滞在する日本人家庭の心理社会的適応	安藤 幸
研究活動スタート支援	教育モデルの国際移動メカニズムの検証: EDU-Portを一例として	高山 敬太
国際共同研究強化(B)	他なるものとの共存に向けた政治教育:日本先導によるアメリカ実践哲学の国際対話研究	齋藤 直子
国際共同研究強化(B)	認知リソース概念の誤謬に挑む国際共同研究	齊藤 智
新学術領域研究	コミュニケーション意図の推論とその非定型性に関する定量的検討(研究領域提案型)	明地 洋典
研究成果公開促進費 (研究成果公開発表(B)) ひらめき☆ときめきサイエンス	ダイバーシティと生きる:人と社会を科学する	安藤 幸

諸記録

教員寄贈図書(令和元年度)

寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
石井 英真	教育研究の新章(ニュー・チャプター)=New chapter of the japanese educational research	世織書房	2019
川崎 良孝	川崎良孝教授経歴と著作目録 2019増補版	京都大学大学院教育学研究科 図書館情報学メディア学研究室	2019
楠見 孝	大学生のためのクリティカルシンキング:学びの基礎から教える実践へ	北大路書房	2019
桑原 知子	グループワーク<ミソドラマ>で子どもの心の声を聴く:子どもが変わる!クラスが変わる!	創元社	2019
齋藤 直子	「自分を変える」ということ:アメリカの偉大なる哲学者エマソンからの伝言: message from Ralph Waldo Emerson	幻冬舎	2019
佐藤 卓己	大衆の強奪:全体主義政治宣伝の心理学(叢書パルマコン 01)	創元社	2019
南部 広孝	比較教育学原論	協同出版	2019
南部 広孝	後発国における大学院教育及び学位制度の導入と変容に関する比較研究 中間報告書第2冊	南部広孝	2019
西 見奈子	いかにして日本の精神分析は始まったか:草創期の5人の男と患者たち	みすず書房	2019
西平 直	稽古の思想	春秋社	2019
西平 直	ライフサイクルの哲学	東京大学出版会	2019
松下 佳代	Deep active learning : toward greater depth in university education	Springer	c2018
松下 姫歌	心的現実感(リアリティ)と離人感:質問紙と風景構成法から見る新たな心理アセスメントへの展開(アカデミア叢書)	創元社	2019
森口 佑介	インスタントヘルプ!10代のための実行機能トレーニング:準備が苦手、忘れものが多い、考えがまとまらない子どもをヘルプするワーク(10代の心理をサポートするワークブック 1)	合同出版	2019
矢野 智司	敏待と戦争の教育学:国民教育と世界市民の形成	東京大学出版会	2019
山中 康裕	悪における善:心理学のパラドックス	青土社	2019

受入期間: 2019/4/1~2020/3/31 寄贈者氏名順(敬称略)
教育学研究科・教育学部図書室にいただいた寄贈者の著作・翻訳・監修のみ掲載です。
今後とも蔵書充実のために寄贈くださいますようよろしくお願いいたします。

人事異動(2019.12.1-2020.4.30)

令和2年1月21日

派遣職員(総務掛)

採用

令和2年1月31日

派遣職員(総務掛)

任期満了

令和2年3月31日

矢野 智司	教授(教育・人間科学)	定年退職
桑原 知子	教授(臨床心理学)	定年退職
吉川 左紀子	特定教授(こころの未来研究センター)	定年退職
森口 佑介	准教授(教育・人間科学)	文学研究科へ配置換
椎名 健人	助教(教育社会学)	退職
藤野 正寛	助教(教育研究関連)	退職
田中 友香理	特定助教(教育・人間科学)	任期満了
千葉 友里香	特定助教(臨床心理学)	任期満了
鈴木 優佳	特定助教(臨床心理学)	任期満了
大山 泰宏	研究員(臨床心理学)	任期満了
次橋 秀樹	研究員(教育・人間科学)	任期満了
島田 健太郎	研究員・教務補佐員(地域連携教育研究推進ユニット)	任期満了
	事務補佐員(グローバル教育展開オフィス)	任期満了
	事務補佐員(教育・人間科学)	任期満了
	事務補佐員(教育実践コラボレーション・センター)	任期満了
	事務補佐員(臨床教育実践研究センター)	任期満了
	派遣職員(教務掛)	任期満了

令和2年4月1日

楠見 孝	教授	研究科長・学部長	教育学系長
		人文・社会学域長	(任期R2.4.1-R4.3.31)
佐藤 卓己	教授	副研究科長	(任期R2.4.1-R4.3.31)
南部 広孝	教授	副研究科長	(任期R2.4.1-R4.3.31)
齋藤 直子	教授	現代教育基礎学系長	(任期R2.4.1-R3.3.31)
齋藤 智	教授	教育心理学系長	(任期R2.4.1-R3.3.31)
佐野 真由子	教授	相関教育システム論系長	(任期R2.4.1-R3.3.31)
田中 智子	准教授		
		国際高等教育院へ配置換	(大学院教育学研究科併任)
竹内 里欧	准教授		国際高等教育院より配置換
齋藤 直子	教授(教育・人間科学)		昇任
田中 康裕	教授(臨床心理学)		昇任
立木 康介	教授(人文科学研究科)		昇任
高橋 雄介	准教授(教育認知心理学)		採用
明地 洋典	准教授(教育・人間科学)		採用
佐藤 万知	准教授(高等教育研究開発推進センター)		採用
三野 和恵	助教(教育・人間科学)		採用
野田 実希	助教(臨床心理学)		採用
荒木 茂	掛長(教職教務掛)		
		経済学研究科掛長(教務掛)へ配置換	
鞆 尚子	掛長(総務掛)		
		吉田南構内共通事務総務課掛長(総務掛)へ配置換	
森常 恭平	掛員(教務掛)		
		国際高等教育院(共通教育公務掛、兼吉田カレッジオフィス教務掛)へ配置換	
中野 秋子	掛長(総務掛)	経済研究所主任(総務掛)	より配置換
和田 美加	掛長(教職教務掛)	経済研究科掛長(教務掛)	より配置換
奥村 悠人	掛員(教務掛)		
		教育推進・学生支援部学生課(総務掛)より配置換	
秋山 知宏	研究員(教育・人間科学)		採用
	技術補佐員(教育・人間科学)		採用
	事務補佐員(地域連携教育研究推進ユニット)		採用
	事務補佐員(グローバル教育展開オフィス)		採用
	派遣職員(教務掛)		採用
	派遣職員(教育認知心理学講座)		採用

令和2年4月30日

派遣職員(教育認知心理学講座)

任期満了

教育学研究科・教育学部基金

ご寄付いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。(公開をご希望されない方については、掲載しておりません。)

前田 史夫
宮本 忠治
高橋 登
池田 実
田中 欣和

(五十音順)

令和2年5月31日現在

ー未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みますー

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場など人が育っていくあらゆる場を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を磨きますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しました。本基金では、研究の成果

を現場(フィールド)に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

基金の使途:

項 目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣 など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催 など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動 など

詳細については以下をご覧ください。

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>

新任教員・事務職員紹介



高橋 雄介

准教授

高等教育で2年、デザイン学で3.5年、白眉で3.5年、既に都合9年間京大にお世話になっている4度目の新任です。引き続きどうか宜しくお願い致します。

所 属 教育認知心理学講座
専 門 教育心理学・発達心理学



明地 洋典

准教授

通常ではない状況の中での赴任になりましたが、自分なりにやっていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

所 属 教育・人間科学講座
専 門 発達科学、認知科学

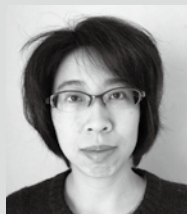


佐藤 万知

准教授

高等教育研究の領域で、社会人類学の視点を持ちつつ、大学教員の専門性や、政策や組織の変容と個人の関係に関心を持って研究と実践を進めています。どうぞよろしくお願いいたします。

所 属 連携教育学講座
(協力) 高等教育研究開発推進センター
専 門 高等教育学・東南アジア研究



三野 和恵

助教

日本統治下台湾のキリスト教思想史・植民地史を、スコットランド人宣教師と台湾人改宗者の相互関係を通して追ってきました。どうぞよろしくお願いいたします。

所 属 教育・人間科学講座
専 門 教育史学



野田 実希

特定助教

心理臨床の実践と研究、方法論的検討を行っています。これまでの学びと経験を生かして、教育、研究、実践に精一杯取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

所 属 臨床心理学講座
専 門 心理療法、心理臨床におけるナラティブをめぐる方法論

中野 秋子 掛長

4月1日付で経済研究所から着任いたしました。同じ文系内の異動ですが、不慣れな点も多々ございますので、どうぞよろしくお願いいたします。

所属掛 総務掛

和田 美加 掛長

4月から教職教務掛でお世話になっております。至らない点もあるかと思いますが、皆様のサポートが出来るよう頑張ります。よろしくお願いいたします。

所属掛 教職教務掛

奥村 悠人 掛員

4月1日付で教務掛に配置換となりました。教務の事務に携わるのは初めてですが、皆様のお役に立てるよう頑張ります。困ったことなどがあれば気軽に声をかけてください。よろしくお願いいたします。

所属掛 教務掛

編集後記



この数ヶ月、新型コロナウイルス感染症対策に追われる中で、授業も会議もオンライン方式で意外とやりくりできることに驚かされた。他方で、ビデオがオフで人の顔が見えないまま語る際には大きな戸惑いを感じざるをえなかった。授業の中での学生のちょっとした表情や態度が(いぶかしげな表情や眠たげな態度を含めて!)いかに貴重なフィードバックであるか、今さらながら気づかされた。この経験を「コロナ後」にいかにかすべきか、思案中。(駒込 武)



京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

- 委員長 駒込 武 教授 (教育・人間科学講座)
- 委員 梅村高太郎 講師 (臨床心理学講座)
- 委員 服部 憲児 准教授 (教育社会学講座)
- 委員 小西 博之 事務長
- 委員 中野 秋子 総務掛長
- 委員 宇野 純子 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

TEL 075(753)3000

ホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>